

昭和映画録 —二度の黄金時代—

会 期：令和8年3月20日（金）～5月10日（日）
会 場：昭和館3階研修室
後 援：千代田区・千代田区教育委員会

展示点数：106点

内訳：

- ① 実物89点
- ② 写真9点
- ③ 映像8点

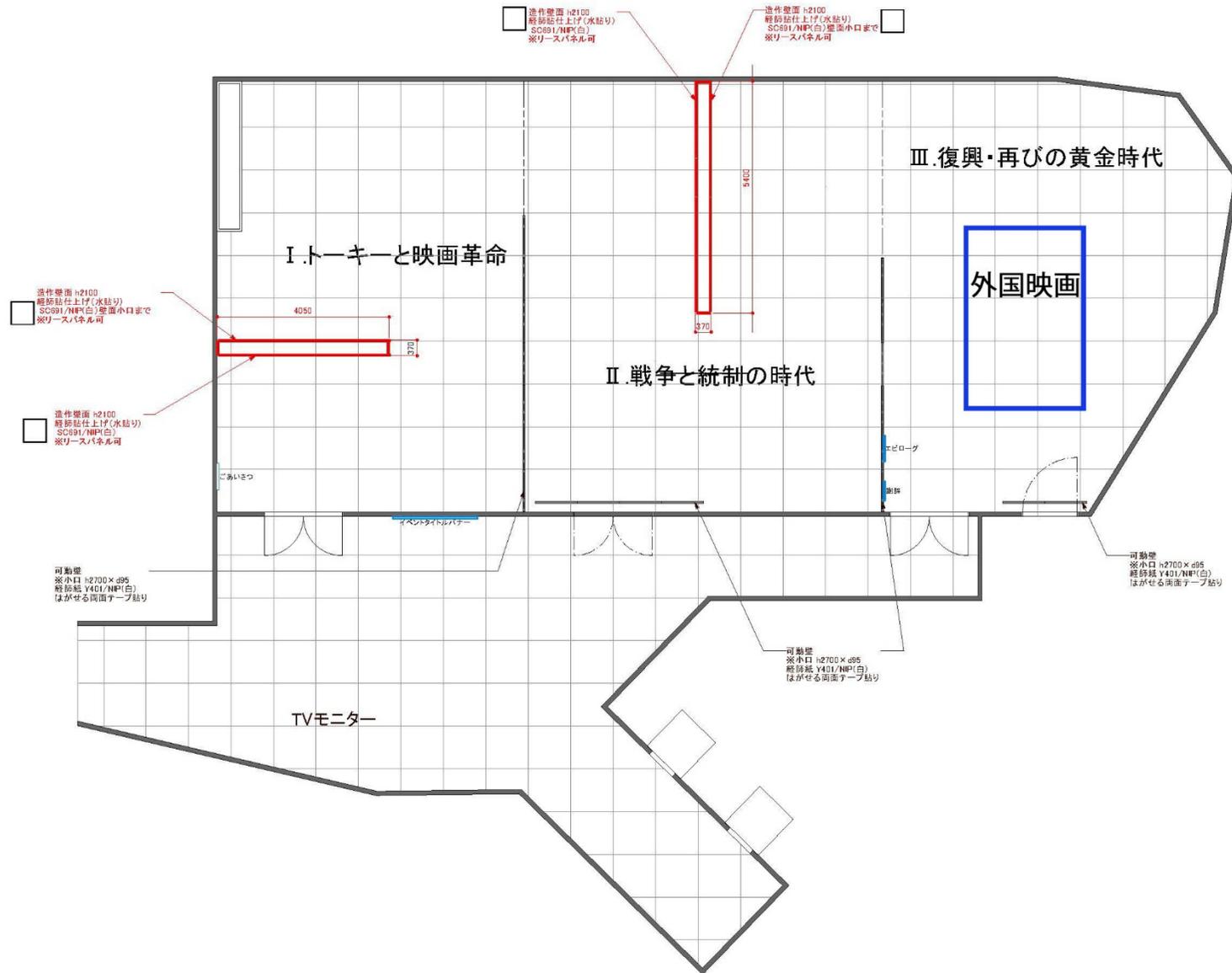
ごあいさつ

昭和の時代、日本映画は二度の黄金期を経験し発展を遂げてきました。無声映画からトーキー映画に代わる1930年代、そして映画が大衆娯楽の中心として絶頂期を迎える1950年代。この黄金期の間には、戦争・占領・復興を経て変化し続ける日本社会の姿がありました。

昭和100年を迎えた今、本企画展では映画の歴史をたどりながら、社会・文化と大きく変容を遂げた昭和の時代を振り返ります。

本展では、「Ⅰ. トーキーと映画革命」、「Ⅱ. 戦争と統制の時代」、「Ⅲ. 復興・再びの黄金時代」のコーナーに分けて紹介します。

- Ⅰ. トーキーと映画革命
- Ⅱ. 戦争と統制の時代
- Ⅲ. 復興・再びの黄金時代



I. トーキーと映画革命

I. トーキーと映画革命

サイレント（無声）に対して、映像と音声を連動させた映画をトーキー（talkie）と呼びます。昭和2年（1927）、アメリカで初のトーキー映画「ジャズ・シンガー」が公開され、大ヒットを記録したことを機に、映画界ではトーキー革命が巻き起こりました。

日本で初めて本格的なトーキー映画が作られたのは、昭和6年の松竹キネマ株式会社製作による「マダムと女房」でした。従来のサイレント映画に代わり、トーキー映画が主流となるにつれ、松竹株式会社・東宝株式会社・日本活動写真株式会社（以下日活）などの大手映画製作会社を筆頭に映画の競作が相次ぎます。人気俳優や監督の登場、映画館の増加などを背景に独自のトーキー文化を築いた日本映画は、1930年代に一度目の黄金時代を迎えました。

サイレントからトーキーへ

昭和5年（1930）頃には、輸入される外国映画の主流はトーキーに移っていきました。その一方で、日本映画はトーキー技術が伝わった後もしばらくはサイレントとトーキーが共存し、完全にトーキーへ移行するまでには時間を要しました。

当時、昭和恐慌の影響で日本経済は深刻な不況に陥っていました。映画製作会社はトーキー化に伴う高額な撮影機材への投資が必要となり、この結果、中小プロダクションは大手映画製作会社との合併を余儀なくされます。また、映画館側もトーキー用の映写設備へ刷新するために多額の費用がかかりました。

大手映画製作会社を中心となりトーキー技術が定着すると、映画館の活動弁士は次第にその姿を消していきます。音響と一体化した新しい映画の形は、昭和初期から不況が続く社会にすばやく浸透し、日本映画は一大産業へと発展していきました。



「金色夜叉」

日活製作による尾崎紅葉『金色夜叉』の映画化作品。前年には松竹の「金色夜叉」が公開され、同じ題材で各社の競作が相次ぎ、文芸映画が流行した。

原作：尾崎紅葉 監督：青山三郎 出演：鈴木傳明、山田五十鈴ほか

日活

昭和8年（1933）



「君よ高らかに歌へ」

ロサンゼルスオリンピックの水泳選手であった豊田満が、大船撮影所1期生として松竹に入社後、デビューした作品。松竹はトーキー化に伴い昭和11年に蒲田から大船に撮影所を移転した。

監督：清水宏 出演：豊田満、三宅邦子ほか

松竹

昭和11年（1936）

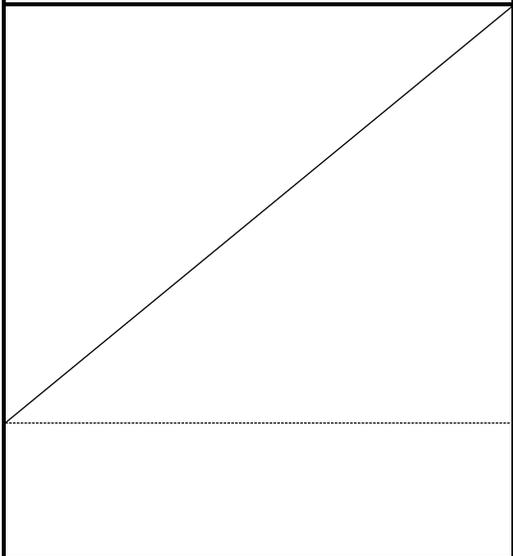
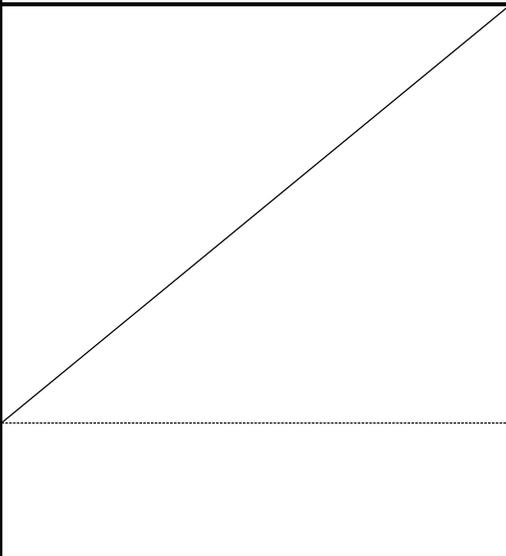
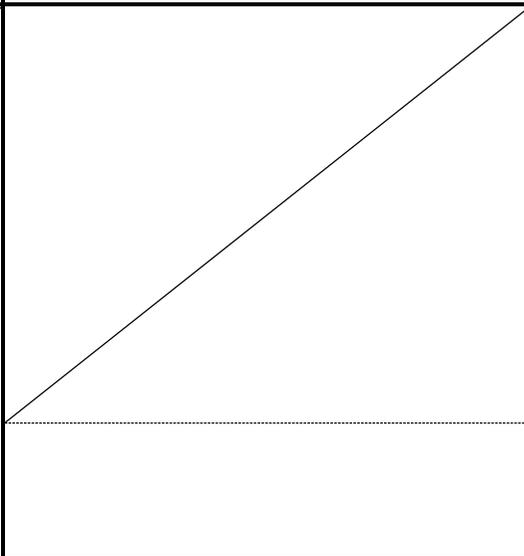
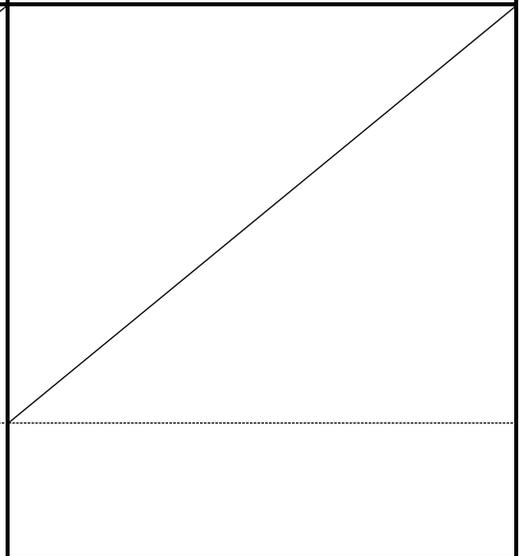


日本劇場

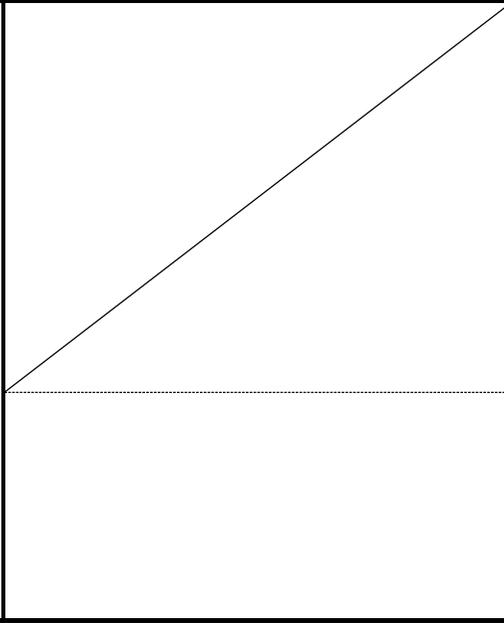
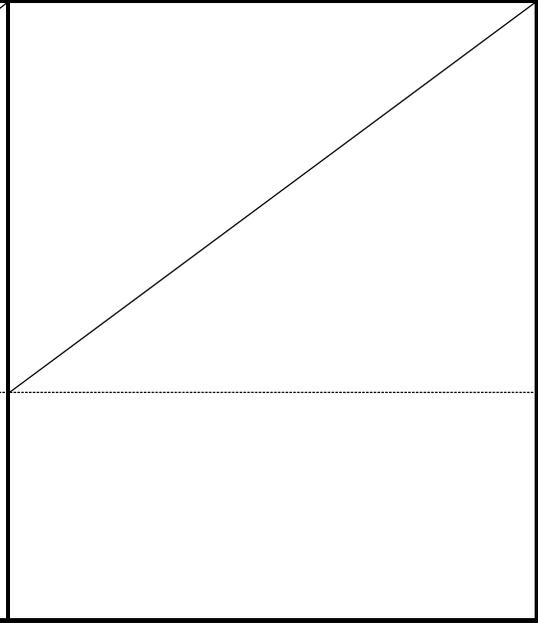
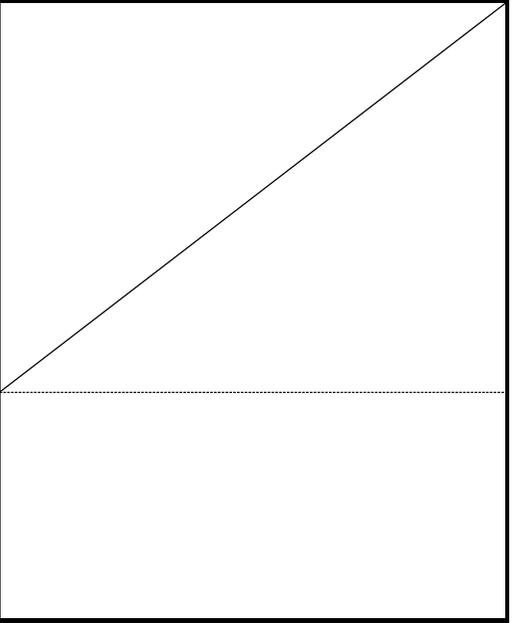
昭和8年に東京・有楽町に誕生した大規模劇場。映画上映の他、演劇興行も行われた。開業当時は日本映画劇場株式会社が経営していたが、経営難により後に東宝に吸収された。

石川光陽撮影
昭和9年（1934）

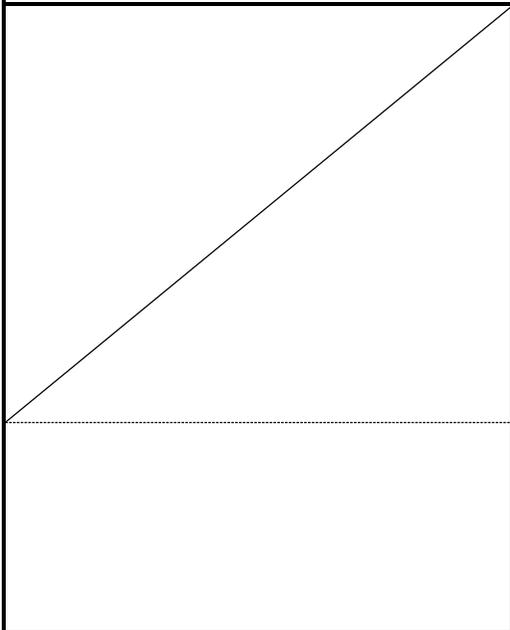
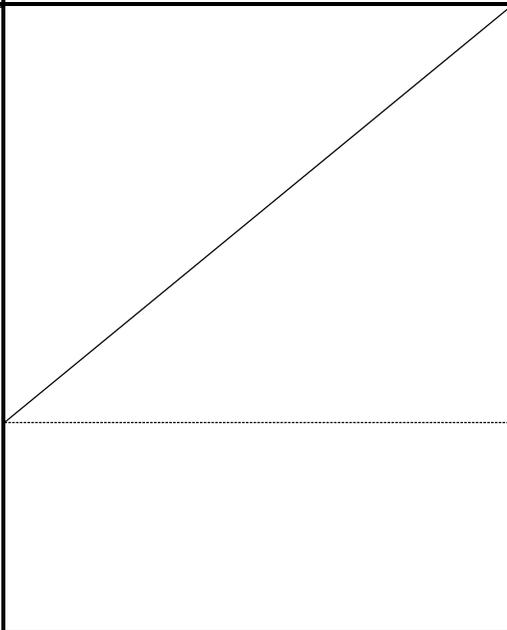
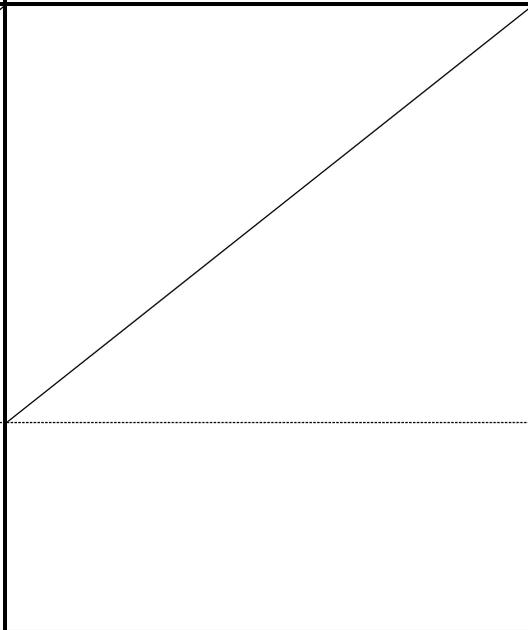
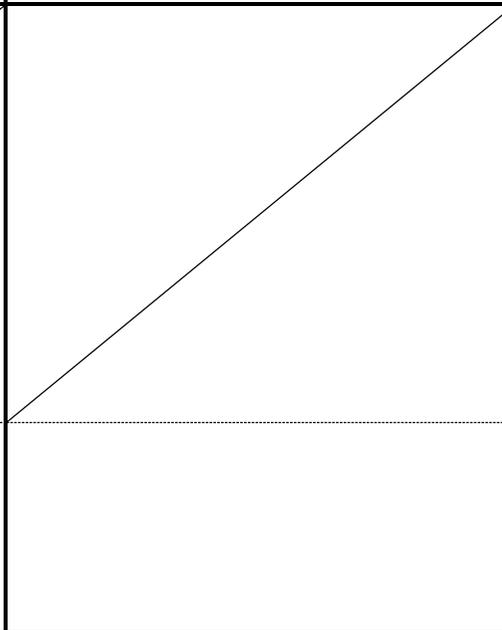
I. トーキーと映画革命

			
<p>「浅草電気館 ニュース第一九一号」 日本初の映画専門劇場である浅草電気館が発行した上映チラシ。活動弁士が台詞付けをするサウンド版映画（音楽付のサイレント映画）とトーキーの映画が上映されている。 昭和10年（1935）4月</p>	<p>「暁の麗人」（「東谷座ニュース 333」） 昭和6年に創立した新興キネマの東京撮影所完成記念として製作された映画。 原作：陶山密 監督：曾根千晴 出演：高田稔、伏見信子ほか 新興キネマ 昭和10年（1935）</p>	<p>「永久の愛」（「京都座週報 4.15」） 松竹創立十五周年記念映画として、オールスターが出演した映画。大船撮影所への移転を前に、「蒲田さよなら映画」として大々的な宣伝を行い、好評を博した。 原作：城戸四郎 監督：池田義信 出演：栗島すみ子、田中絹代ほか 松竹 昭和10年（1935）</p>	<p>「からゆきさん」 P.C.L（写真化学研究所）映画製作所による作品。 原作：鮫島麟太郎 監督：木村莊十二 出演：入江たか子、北沢彪ほか 東宝 昭和12年（1937）</p>
			

I. トーキーと映画革命

<p>時代劇の隆盛</p> <p>日本で最初の時代劇映画が作られたのは、明治41年（1908）、牧野省三監督による「本能寺合戦」でした。その後、時代劇は日本映画の大きな柱として、時代の世相を取り込みながら常に人気作品を生み出し続けました。</p> <p>サイレント映画では、大回りの殺陣を主軸とする剣劇が中心でしたが、トーキー化により役者の台詞の時間が増えたことで、ストーリー性重視の喜劇や明朗時代劇が人気となっていきます。評判の高い時代劇映画の監督としては、伊丹万作や山中貞雄、稲垣浩、マキノ正博（雅弘）などが並びました。また、阪東妻三郎や大河内傳次郎をはじめとした、ハマリ役と呼ばれる俳優たちの存在が人気作品を生み出すきっかけにもなりました。</p>	 <p>「丹下左膳 妖刀隻手の巻」 隻眼隻手の剣客・丹下左膳を主人公にした作品。個性的なキャラクターの丹下左膳は、大河内傳次郎の代名詞となり、戦後に至るまでシリーズ化された。 原作：川口松太郎 監督：渡辺邦男 出演：大河内傳次郎、山田五十鈴ほか</p> <p style="text-align: right;">東宝 昭和13年（1938）</p>	 <p>「毒蛇 剣豪妖刀篇」 時代劇映画を数多く手がけた稲垣浩の監督作品。 監督：稲垣浩 出演：阪東妻三郎、市川春代ほか</p> <p style="text-align: right;">日活 昭和13年（1938）</p>	
 <p>「右門捕物帖 拾萬両秘聞」 嵐寛寿郎と志村喬のコンビが人気となり、シリーズ化された「右門捕物帖」の一作品。 原作：佐々木味津三 監督：荒井良平 出演：嵐寛寿郎、志村喬ほか</p> <p style="text-align: right;">日活 昭和14年（1939）</p>			

I. トーキーと映画革命

 			
<p>「新納鶴千代」(「夷谷座ニュース 322」) 阪東妻三郎のトーキー映画初出演作。主題歌は藤山一郎が歌い、人気を呼んだ。原作：郡司次郎正 監督：伊藤大輔 出演：阪東妻三郎、山田五十鈴ほか 新興キネマ 昭和10年(1935)8月</p>	<p>「WEEKLY TEIKOKU NO. 692」 日活のトーキー映画のチラシ。稲垣浩監督と、大河内傳次郎の主演による「千両磔」が紹介されている。 昭和10年(1935)9月</p>	<p>「夷谷座ニュース 332」 嵐寛寿郎は昭和2年に「鞍馬天狗」の作品でデビューして以降、鞍馬天狗が当たり役となり、一躍人気スターとなった。 昭和10年(1935)11月</p>	<p>「夷谷座ニュース 339」 新興キネマの新作映画を紹介する広告。 昭和10年(1935)12月</p>
			

I. トーキーと映画革命

トーキーと最初の黄金時代

トーキーの到来は従来の日本映画の幅を広げ、新たな人気ジャンルを生み出しました。特に、話芸を得意とする喜劇の分野からは榎本健一や古川緑波、エンタツ・アチャコら人気俳優が誕生しました。

また、サイレント映画では映画主題歌は弁士や歌手が担当していましたが、トーキー化により人気歌手や俳優自らが歌うようになると、映画の主題歌が流行します。劇中で流れる音楽は観客の記憶に残り、主題歌のヒットが映画のヒットを左右するほど、大きな役割を占めるようになりました。

トーキーに移行して、日本映画は最初の黄金時代を迎えます。全国の映画館では連日新作が封切りされるほど、人々の生活に欠かせない娯楽文化として根付いていきました。



「エノケンの法界坊」
喜劇映画を得意とする斎藤寅次郎が監督。「エノケン」の愛称で親しまれ、日本の喜劇王と呼ばれた榎本健一主演の作品。
監督：斎藤寅次郎 出演：榎本健一、宏川光子ほか

東宝
昭和13年(1938)



「愛染かつら全集大会」
トーキー化により人気ジャンルの一つとなったメロドラマ映画の代表作。映画とともに主題歌が流行し、話題を呼んだ。
原作：川口松太郎 監督：野村浩将 出演：田中絹代、上原謙ほか

松竹
昭和14年(1939)頃



「日本映画俳優人気鑑」
戦前から戦中にかけて活躍した人気映画俳優たちを紹介するポスター。

昭和17年(1942)



映画製作のため警視庁を訪れた映画スター
松竹の映画「せめて今宵を」の撮影のため、警視庁を訪れた映画スターたちの様子。中央の女性が田中絹代、左側が佐分利信。田中は日本映画黎明期から活躍し、松竹の看板女優となった。

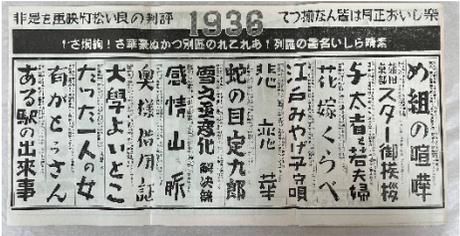
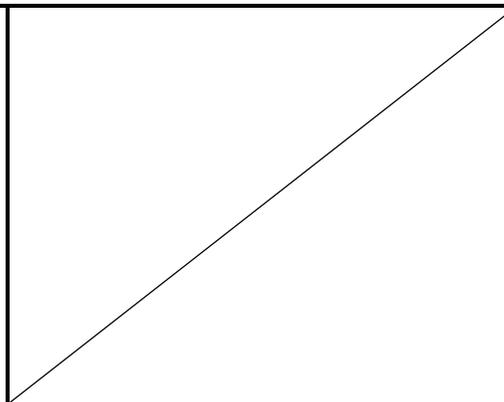
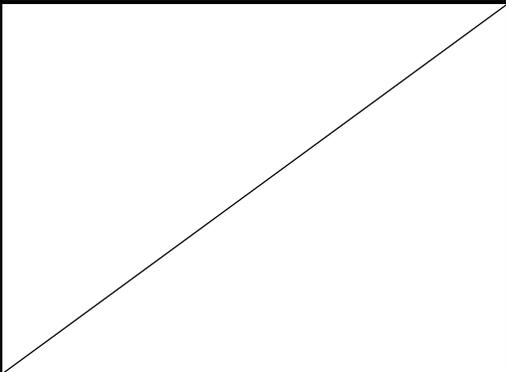
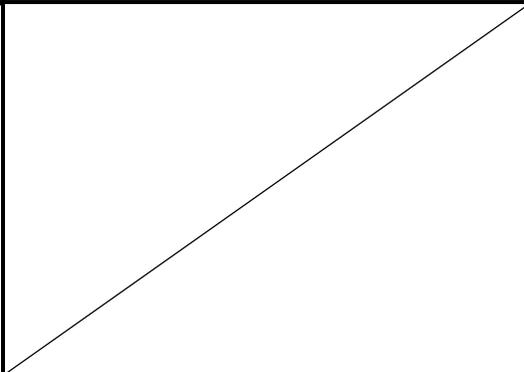
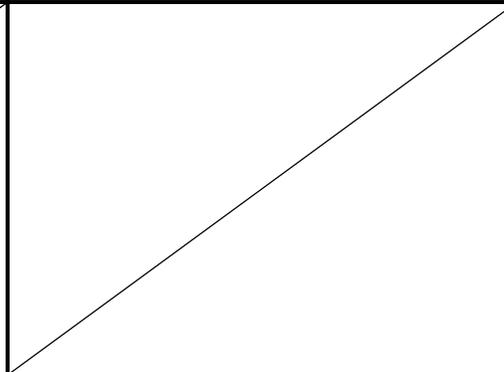
石川光陽撮影
昭和10年(1935)9月



プロマイド店で写真を見る女性たち・浅草
浅草のマルベル堂で映画スターの写真を見る女性たち。映画スターの写真はプロマイドと呼ばれ、大正10年(1921)頃から発売された。

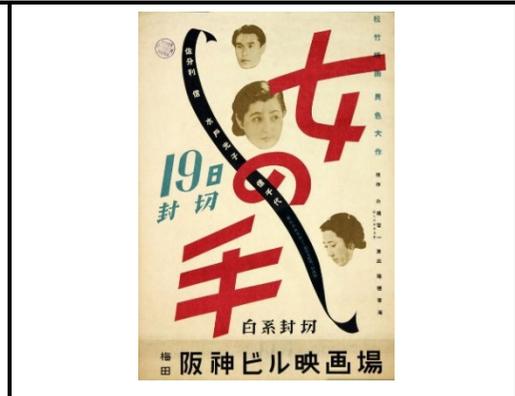
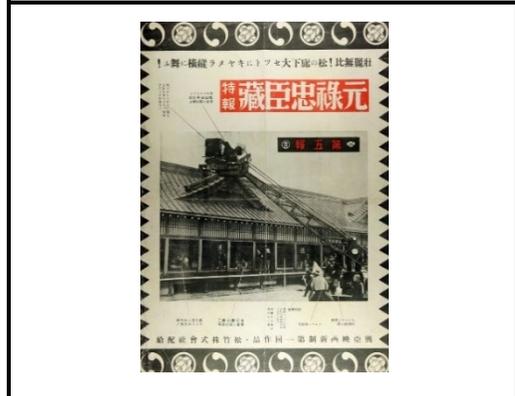
師岡宏次撮影
昭和13年(1938)

I. トーキーと映画革命

			
<p>「京都座週報 NO. 4. 24」 昭和 11 年の正月に上映する松竹映画の宣伝広告。 昭和 10 年 (1935) 12 月</p>	<p>「新しき土」プレスブック アーノルド・ファンクと伊丹万作の共同監督により製作された日独合作映画。祖国への愛を主題に日本の山岳風景を盛り込んだ作品。 監督：アーノルド・ファンク、伊丹万作 出演：原節子、早川雪洲ほか 昭和 12 年 (1937)</p>	<p>「林長二郎東宝入社！」 松竹の時代劇スターとして活躍していた林長二郎が、昭和 12 年に東宝に移籍。その後、長谷川一夫と改名し、戦後も人気俳優として活躍した。 昭和 12 年 (1937)</p>	
			
<p>パテ・ルックス映写機 昭和 8 年に発売された小型映写機。大手映画会社からは劇場用映画の短縮版が多数販売されるなど、家庭でも映画を楽しむための映写機が人気を博した。 昭和 8 年 (1933) 発売</p>			

II. 戦争と統制の時代

<p>II. 戦争と統制の時代</p> <p>昭和 12 年（1937）に日中戦争が勃発すると、映画は娯楽のみならず、国策宣伝を担うメディアとして利用されていきました。新聞や出版物など、メディアの言論統制が強化されていくなかで、昭和 14 年に映画法が制定されると、脚本の事前検閲、外国映画の上映などが厳しく規制されます。</p> <p>戦地や銃後の様子を題材とした国策映画が多数作られる一方で、製作会社の統廃合が行われ、昭和 17 年には大日本映画製作株式会社（以下大映）・松竹・東宝の 3 社のみとなります。戦況の悪化とともにフィルムなどの物資不足が深刻となり、アメリカに次ぐ映画製作数を誇った日本映画も、その数を減らしていきました。</p>	<p>映画の戦時体制</p> <p>昭和 14 年（1939）の映画法の制定を機に、映画界は本格的な戦時体制に組み込まれていきました。さらに、昭和 16 年には海外からの輸入に頼っていたフィルムの入手が制限されたことで、映画の製作自体が困難となり、戦前の黄金期を経て大資本化した映画業界も企業の統合を余儀なくされます。</p> <p>昭和 17 年、大手映画製作会社の松竹と東宝に加え、日活と新興キネマが合併して大映が誕生しました。同 17 年には配給会社も整理され、各社の配給部門を統合した社団法人映画配給社が創立します。全国の映画館は紅白の二系統に分類され、各系統の新作は 2 週間に 1 本ずつの公開と決められたことで、映画の製作から配給、公開までが一貫して、政府の統制下に置かれました。</p>
--	--



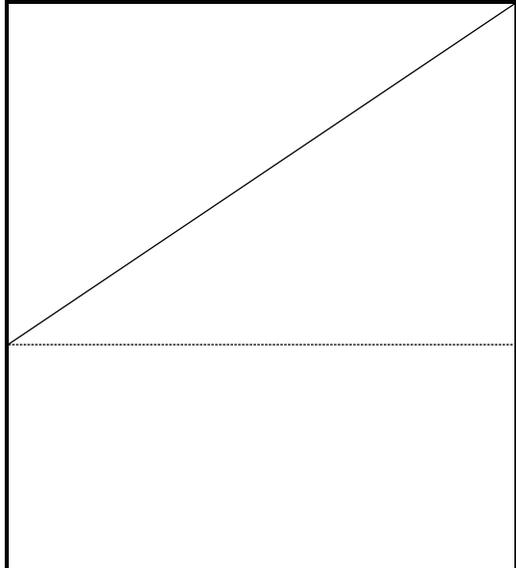
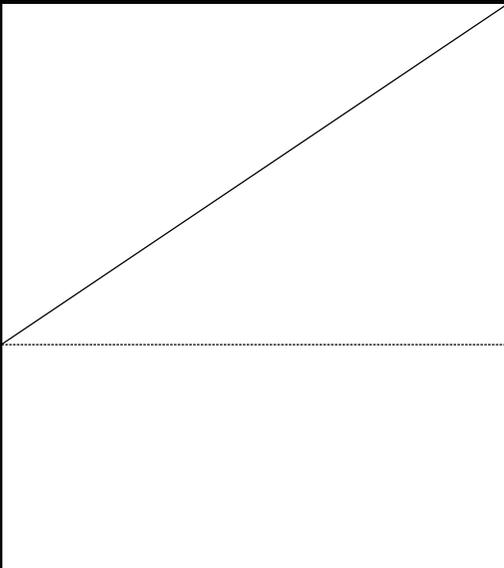
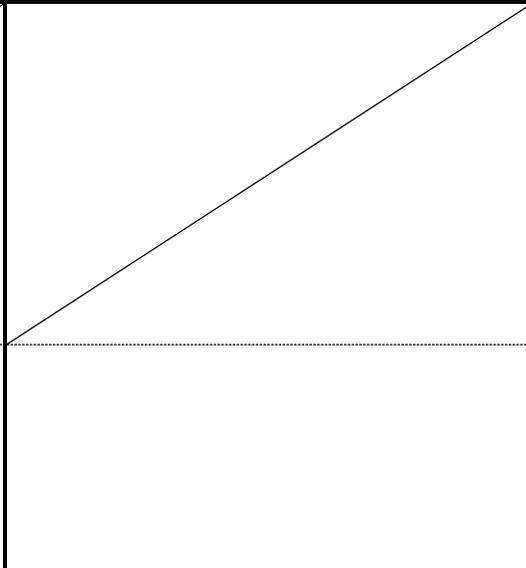
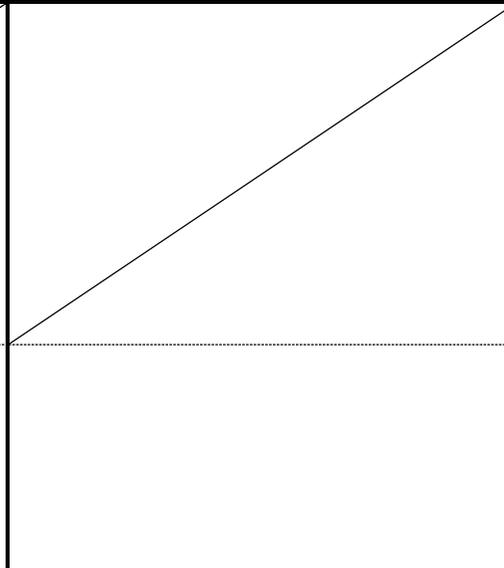
「元禄忠臣蔵特報 第五報」
 従来の忠臣蔵とは異なり、討ち入り場面を描かないことで話題を呼んだ作品。江戸城松の廊下を原寸大で再現するなど莫大な予算を投じて製作された。
 原作：真山青果 監督：溝口健二 出演：四代目河原崎長十郎、三代目中村翫右衛門ほか
 松竹（興亜映画）
 昭和 16 年（1941）

「土に生きる」
 民俗学者・柳田國男の監修による秋田県の農村の暮らしや風俗を記録したドキュメンタリー映画。ポスターには秋田県出身の版画家勝平得之の作品が使用された。
 監督：三木茂 解説：徳川夢声
 東宝
 昭和 16 年（1941）

「婦系図」
 人情劇に定評のあるマキノ正博の監督作品。映画の公開に合わせて作られた主題歌「湯島の白梅」とともに人気を呼んだ。
 原作：泉鏡花 監督：マキノ正博 出演：長谷川一夫、山田五十鈴ほか
 東宝
 昭和 17 年（1942）

「女の手」
 白系映画館で公開された新作映画のポスター。婦人倶楽部に連載された小説を映画化した作品。厚生省（現・厚生労働省）・大日本雄弁会講談社（現・講談社）・松竹の共同企画。
 原作：舟橋聖一 監督：瑞穂春海 出演：佐分利信、水戸光子ほか
 松竹
 昭和 17 年（1942）

II. 戦争と統制の時代

			
<p>「福井東宝映画劇場 NO. 63」 映画「支那の夜」は渡辺はま子が歌うヒット曲をもとにした作品。「白蘭の歌」・「熱砂の誓ひ」と合わせ大陸三部作と呼ばれた。李香蘭はこの三部作をきっかけに、日本でも一躍人気女優となった。 東宝 昭和15年(1940)6月</p>	<p>皇軍慰問用愛国写真カード(新進映画女優) 原節子や高杉早苗など、人気映画女優のプロマイドが入った慰問用カード。 戦中</p>	<p>観覧券(日本劇場) 昭和9年(1934)3月</p>	<p>観覧券(シネマパレス) 昭和16年(1934)から19年</p>
			

II. 戦争と統制の時代

プロパガンダと国策映画

大衆娯楽の中心であった映画は、戦争により国策宣伝のメディアとして活用されました。映画法の制定により、内務省（後に内閣情報局所管）検閲のもと映画製作会社は戦意高揚のための国策映画の製作が求められました。なかでも東宝は、最新の航空撮影技術を活かし、軍部から委託を受け、多くの記録映画製作に携わりました。

また、全国の映画館では長編の劇映画に対して、国策宣伝のための文化映画の上映が義務付けられます。文化映画は、国民精神を養うことを目的として作られた映画で、教材としての教育映画や、ニュース映画などが含まれ、戦時下では多くの文化映画が製作されました。



浅草六区で行われた防空訓練・浅草
浅草六区にある映画館・千代田館で行われた防空訓練の様子。看板の「熱砂の誓ひ」は昭和15年に公開された李香蘭主演の国策映画。

石川光陽撮影
昭和16年（1941）10月



「北支の黎明」
満鉄映画製作所が手がけた日中戦争・華北戦線の従軍記録映画。
撮影・編集：芥川光蔵

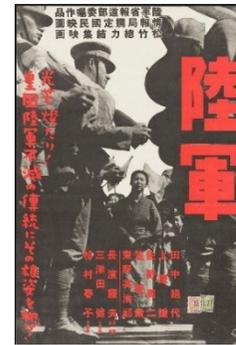
南満州鉄道株式会社
昭和12年（1937）



「或る保姆の記録」
東京の保育所を舞台に、戦時下の働く母と子の生活を主題として撮影された文化映画。
演出：水木荘也 脚色：厚木たか
芸術映画社
昭和17年（1942）



「敵国アメリカ映画謀略展」
敵性映画とされたアメリカ映画に対する啓蒙を目的とした展覧会ポスター。日米開戦以降は、アメリカ映画の輸入も禁止された。
昭和18年（1943）



「陸軍」
太平洋戦争開戦3周年に際して、陸軍省が松竹へ製作を委嘱した映画。出征する息子を送り出す母を主題に描かれた作品。
原作：火野葦平 監督：木下恵介 出演：田中絹代、上原謙ほか
松竹
昭和19年（1944）

II. 戦争と統制の時代



「米英撃滅の歌」『新映画 六月号』
映画出版社が刊行した映画雑誌。軍歌の広報を目的に作られた松竹映画、「撃滅の歌」の特集記事が組まれている。出演は高峰美枝子、轟夕起子、月丘夢路ら。

昭和 19 年 (1944) 6 月



「燃ゆる大空」
陸軍航空部隊を主題とした作品。航空機約 900 機が撮影に参加し、陸軍省の全面協力のもとで製作された。霧島昇と藤山一郎が歌う主題歌も軍歌としてヒットを記録した。

監督：阿部豊 出演：大日方傳、灰田勝彦ほか
東宝
昭和 15 年 (1940)



「西住戦車長傳」
陸軍の軍神と呼ばれた戦車連隊の西住小次郎の活躍を描いた作品。昭和 15 年度の松竹映画の中で最高興行収入を記録した。

原作：菊池寛 監督：吉村公三郎 出演：上原謙、佐分利信ほか
松竹
昭和 15 年 (1940)



「ハワイマレー沖海戦」
海軍報道部企画による真珠湾攻撃とマレー沖開戦を描いた作品。特殊撮影には円谷英二が参加し、真珠湾のミニチュアセットでの撮影は、戦後に GHQ が本物の記録映像と見間違ふほど精巧に作られていた。

監督：山本嘉次郎 出演：伊東薫、英百合子ほか
東宝
昭和 17 年 (1942)



「かくて神風は吹く」
元寇の神風の故事を扱った時代劇作品。当初は五所平之助が監督する予定であったが、内閣情報局との折り合いがつかず、丸根賛太郎に変更して作られた。

原作：菊池寛 監督：丸根賛太郎 出演：阪東妻三郎、片岡千恵蔵ほか

大映
昭和 19 年 (1944)



作文綴り「映画『海軍』をみて」
世田谷区立代沢国民学校（現・世田谷区立代沢小学校）の 6 年生児童が、昭和 18 年に公開された松竹の「海軍」を観て書いた感想文。綴った後は親にも回覧し、感想が記されている。

昭和 18 年 (1943) 12 月



「海軍」
太平洋戦争 2 周年に際して、海軍報道部の企画により製作された作品。真珠湾攻撃を主題に、九軍神の一人・横山正治をモデルに描かれた。

原作：岩田豊雄 監督：田坂具隆 出演：山内明、志村久ほか

松竹
昭和 18 年 (1943)



『戦争映画と児童』
昭和 17 年度に麴町区（現・千代田区）内の国民学校で、初等科の児童が観た国策映画作品が紹介されている。

昭和 18 年 (1943) 4 月

II. 戦争と統制の時代

慰問と映画

日中戦争以降、戦地の兵士たちをねぎらうために、演劇や映画上映会などの慰問活動が積極的に行われるようになります。慰問映画として兵士たちの人気を集めたのは、忠義を題材とした股旅ものや、歴史映画でした。慰問だけでなく映画とともに上映されるニュース映画は、兵士たちにとって離れた故郷の様子を知る情報源にもなりました。

また、戦地にいる兵士への慰問だけでなく、内地では毎月1日の興亜奉公日に出征軍人遺家族の映画館への無料招待などが行われました。その他、増産を奨励するため全国の農村・漁村や工場では、学校の校庭や、施設を利用した慰問映画の上映会が実施されるなど、映画を活用した慰問が普及していきまし

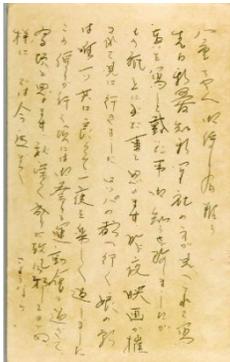
た。



戦地で演奏を披露する岡山県派遣慰問団
岡山県では日中戦争以降、演芸団や県議団を慰問団として戦地に派遣した。ピンポン台の上に乗って演芸を披露する様子。
昭和16年(1941)4月から5月



「日本ニュース 第九号上映中」
日本ニュースは昭和15年から日本映画社によって製作されたニュース映画。
社団法人日本映画社
昭和17年(1942)



はがき

中国に従軍した兵士が内地の婚約者に宛てて書いたはがき。現地で「ロッパ歌の都へ行く」と「娘の願ひは唯一つ」を観たことが記されている。

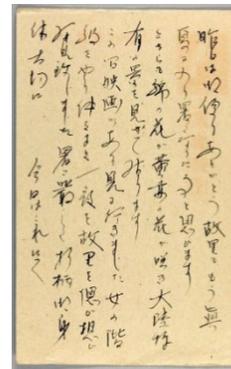
昭和15年(1940)10月4日



手紙

中国に従軍した兵士が内地の祖父に送った手紙。「白蘭の歌」の映画と「民族の祭典」の予告編を観たことが記されている。

昭和16年(1941)2月3日



はがき

「女の階級」の映画を観て、故郷を思い偲んだことが記されている。

昭和16年(1941)8月3日

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

昭和 20 年（1945）9 月、映画界は GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の下部組織である CIE（民間情報教育局）の管理下に置かれることになりました。脚本の検閲のほか、軍国主義や仇討ち物などの映画の上映が禁止となります。また、昭和 21 年には GHQ の外郭団体として設立したセントラル映画社（CMPE）により、国内でのアメリカ映画の上映が解禁され、映画は占領政策の一環として活用されました。

厳しい管理下の中で、戦災により減少していた映画館の数が増えるにつれて、国内の映画製作数も増加していきました。終戦・占領を経て迎えた独立後、日本の映画産業は再び勢いを取り戻し、未曾有の好景気を迎えます。昭和 33 年には観客動員数が歴代最高を記録し、日本映画に再び黄金時代が訪れました。

映画と占領政策

昭和 20 年（1945）11 月、CIE は映画製作会社に対し、13 項目の禁止事項を通達しました。この項目により、軍国主義を鼓舞させるもの、仇討ちや愛国主義的なもの、残忍非道暴行を謳歌するものなどの内容が禁止されます。映画の製作に関わるシナリオなどは全て英訳して、CIE の事前検閲を受ける必要がありました。その一方で、CIE を中心に教育や文化を通じた民主主義思想の教化政策が実施され、映画製作会社には民主主義の啓蒙を図る映画の製作を要求しました。

昭和 24 年、事前検閲制度が廃止される代わりに、GHQ の指導により自主的な審査機関として映画倫理規程管理委員会（映倫）が発足します。その後、昭和 27 年にサンフランシスコ平和条約が発効されるまで、日本の映画界は GHQ の管理の下、映倫による審査・管理が行われました。



「黄金狂時代」

大正 14 年に作られたチャップリンの代表的な喜劇映画。戦後は新たに日本語の解説が吹き込まれ、昭和 21 年に CMPE により公開が許可された。

監督・出演：チャールズ・チャップリンほか



「魚や剣法」

無声映画のポスター。「連合軍検閲局 検閲番号」の表示がされている。

監督：山下秀一、出演：実川延松・久野あかねほか

帝国キネマ
昭和 20 年代前半

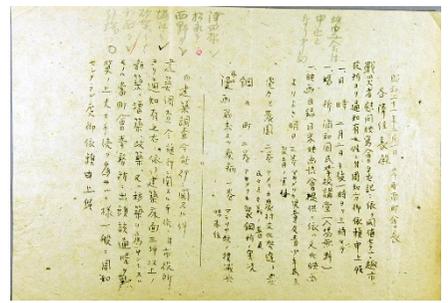


アーニー・パイル劇場（旧・東京宝塚劇場）

昭和 20 年、GHQ により東京宝塚劇場が接收、翌年改称された。主な興行は演劇だったが、外国映画の上映や美術展などが行われ、進駐軍専用の娯楽施設として利用された。

米国国立公文書館提供
昭和 21 年（1946）2 月

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

			
<p>映画「あなたの議会」封切御案内 GHQ 推奨による民主主義の教化映画の宣伝チラシ。昭和21年4月10日の第22回衆議院議員総選挙に向けた作品。 昭和21年(1946)</p>	<p>「戦災者慰問映画会開催」 浦和市（現・さいたま市）が戦災者のために開催した慰問映画会の案内。アメリカの文化映画の作品が挙げられている。 昭和21年(1946)</p>		
<p>「長崎の鐘」 永井隆は、長崎医科大学（現・長崎大学医学部）で放射線物理療法の研究に携わり、昭和20年（1945）8月9日に長崎市内で被爆しました。 昭和24年、永井は自身の原爆体験を元に随筆『長崎の鐘』を出版します。この作品は、GHQの検閲によって出版許可が下りるまでに3年の年月を要しました。 戦後初の原爆を扱った本として『長崎の鐘』はベストセラーとなり、その後は歌謡曲（サトウハチロー作詞、古関裕而作曲）や、映画化されるなど人気の作品となりました。</p>	 <p>「長崎の鐘」 検閲の影響により映画のシナリオは、原作とは異なり、永井隆の生涯を描いた作品となっている。 監督：大庭秀雄、出演：若原雅夫・月丘夢路ほか 松竹 昭和25年(1950)</p>	 <p>『長崎の鐘』 永井隆が自身の被爆体験と救護活動について記した随筆。昭和21年に書き終えたが、GHQの検閲により出版許可が下りなかった。マニラ大虐殺の記録集との合本を条件に出版され、ベストセラーとなった。 昭和24年(1949)1月30日</p>	 <p>手紙 永井隆が日本画家の安西啓明に宛てた書簡。映画「長崎の鐘」と原作との相違を指摘する安西に対し、永井が映画の内容と実生活は別物であると論じている。 昭和25年(1950)10月3日</p>

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

日本映画の復活

昭和20年(1945)10月、松竹の戦後第一作目として「そよかぜ」が封切されると、荒廃した社会の影響を感じさせない内容が、明るい主題歌「リンゴの唄」とともに人気を呼びました。

戦禍により終戦後には約840館に減ってしまった映画館も、昭和25年には全国で約2,400館まで増加しました。映画製作会社の撮影所なども復興を果たすと、製作本数も年々増加していきました。

サンフランシスコ平和条約が調印された昭和26年、黒澤明の「羅生門」がヴェネチア国際映画祭でグランプリを獲得します。続いて、翌年には溝口健二が国際賞を受賞するなど、日本は映画の舞台でも国際社会への進出を果たしました。

昭和21年以降の観客動員数と邦画公開本数



出典：『映画統計資料 昭和21年1月～昭和30年12月(10年間)』社団法人日本映画連合会、および一般社団法人日本映画制作者連盟が毎年1月に発表する映画産業統計(HP)より参照。



映画「銀座カンカン娘」の撮影風景
映画「銀座カンカン娘」は、ミュージカル調の喜劇映画。主題歌「銀座カンカン娘」は主演の高峰秀子が歌唱し大ヒットを記録した。奥に見えるのは高峰秀子(左)、岸井明(中央)、笠置シズ子(右)。
昭和24年(1949)



「酔いどれ天使」
黒澤明監督、三船敏郎でコンビを組んだ最初の作品。戦後の闇市を主題として、昭和23年度「キネマ旬報 ベスト・テン」の第1位に選ばれた。
監督：黒澤明 出演：志村喬・三船敏郎ほか
東宝
昭和23年(1948)

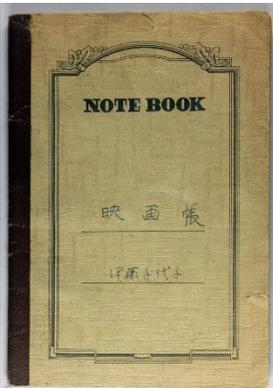


「蜂の巣の子供たち」
復員兵と8人の孤児たちが山陽を共に旅して絆を深める物語。劇中に出てくる子どもたちは役者ではなく、実際の戦災孤児たちが演じた。
監督：清水宏、出演：島村俊作・夏木雅子ほか
蜂の巣清水映画
昭和23年(1948)



「羅生門」
日本映画が初めてヴェネチア国際映画祭でグランプリの金獅子賞を受賞し、監督・黒澤明の名前を世界で一躍有名にした作品。翌年にはアカデミー賞名誉賞を受賞した。
監督：黒澤明、出演：三船敏郎・京マチ子ほか
大映
昭和26年(1951)

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

			
<p>日記帳 日本放送協会（NHK）に勤めていた男性が記した日記。昭和 21 年 10 月 12 日に「そよかぜ」を観たことが記されている。 昭和 21 年（1946）</p>	<p>「そよかぜ」 上映番組と「そよかぜ」の作品紹介が記載された映画館チラシ。 昭和 21 年（1946）</p>	<p>映画帳 東京都立第八女子高等学校（現・東京都立八潮高等学校）の女学生が記した映画の感想などを書いたノート。 昭和 23 年（1948）</p>	<p>御観覧券（スバル座） 昭和 21 年以降</p>
			
<p>『松竹 創刊号』（昭和 21 年 5 月） 松竹が発行した映画雑誌。前身は『蒲田』、後に『オール松竹』と改題され、戦後『松竹』として復刊された。 昭和 21 年（1946） 5 月</p>	<p>台本「Eノケン ロッパの新馬鹿時代」 広報用に配布された映画台本。 昭和 22 年（1947）</p>	<p>「青い山脈」 民主主義を主題に若者の青春が描かれ、本編と続編の 2 本立で、主題歌とともに人気を博した。 原作：石坂洋次郎 監督：今井正 出演：原節子、池部良ほか 東宝 昭和 24 年（1949） 7 月</p>	<p>「カルメン故郷に帰る完成記念特別試写会」 松竹の三十周年記念映画として、富士フィルムによる技術協力のもと「日本映画最初の総天然色映画」の宣伝で話題となった作品。 監督：木下惠介 出演：高峰秀子、小林トシ子ほか 松竹 昭和 26 年（1951）</p>

映画の広がり—文化の大衆化

昭和 28 年（1953）に公開された「君の名は」は、全国的な大ヒットを記録し、登場人物を模したおもちゃや衣類品のコラボ商品など多くの関連グッズが発売されました。なかでも、ヒロイン・氏家真知子が劇中で披露したスカーフ姿は、若い女性の間で「真知子巻き」として人気を博しました。映画を通じた流行は、シネモードと呼ばれ、多くの人々を魅了します。その他にも、「ローマの休日」（昭和 29 年日本公開）や「麗しのサブリナ」（同年日本公開）では主人公を演じたオードリー・ヘップバーンの髪型や服装が流行しました。また、「三月生まれ」（昭和 34 年日本公開）では映画配給会社と株式会社三陽商会がタイアップし、劇中に登場するトレンチコート主演女優の名前を取ってササールコートと題して発売しました。人々の娯楽文化の中心であった映画は、玩具やファッションに至るまで、様々な流行を生み出し続けました。



太陽族の若者たち

アロハシャツに細身のズボンを身につけた太陽族の若者たち。「太陽の季節」や「狂った果実」が公開されると、主人公を演じた石原裕次郎の服装を真似た服装が、若者たちの間で流行した。

毎日新聞社提供
昭和 33 年（1958）



「君の名は 第2部」

昭和 27 年 4 月から NHK のラジオドラマとして放送が開始された。昭和 28 年以降全 3 部作が製作され、大ヒットを記録した。原作：菊田一夫 監督：大庭秀雄 出演：岸恵子、佐田啓二ほか

松竹
昭和 28 年（1953）



着せ替えおもちゃ

岸恵子をモデルにした着せ替えの出来るおもちゃ。「君の名は」で岸恵子が演じるヒロイン・氏家真知子が着用し、流行した真知子巻きも描かれている。

昭和 28 年（1953）



めんこ

石原裕次郎や長谷川一夫をはじめとした人気俳優が描かれためんこ。当時の人気俳優やキャラクターがデザインされためんこが人気を呼んだ。

昭和 30 年代



東宝映画カルタ

人気の映画作品や俳優を題材にした東宝のカルタ。昭和 31 年公開の「空の大怪獣ラドン」や人気スターの八千草薫、新人女優の白川由美などが描かれている。

昭和 32 年（1957）



おもちゃ（ゴジラ）

昭和 29 年に公開されて以降、人気のシリーズとなった東宝の怪獣映画「ゴジラ」のおもちゃ。ゴジラの人気を契機に、東宝は特撮映画製作に注力し、怪獣ブームを巻き起こした。

昭和 39 年（1964）発売

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

キネマベストテン 〈 外国映画 〉

キネマベストテンは、年に一度、映画雑誌『キネマ旬報』が選出する日本最古の映画賞です。大正 13 年（1924）に外国映画を対象として、芸術的・娯楽的側面を評価する二部門で開始しました。大正 15 年からは日本映画も選出の対象となりました。戦中に一時中断するも、昭和 21 年（1946）の復活を機に、現在まで続いています。

昭和 21 年には、アメリカ映画が年間を通して約 40 作品公開されました。あわせて、GHQ は各国につき一社、映画の配給を許可し、次第に諸外国製作の映画も公開されるようになります。

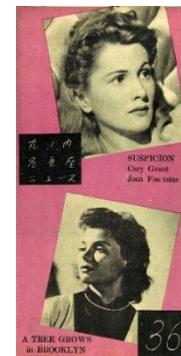
このコーナーでは、外国映画に焦点を当て、昭和 21 年から昭和 30 年までの計 10 年間のキネマベストテンの 1 位を紹介します。

※年代は日本公開年を表記



「我が道を往く」（「洋画鑑賞の葉 NO. 1」）
昭和 19 年製作のアメリカ映画。ニューヨークの教会を舞台に副牧師と人々との交流を描いたヒューマンドラマ。アメリカ映画の伝統的なヒューマニズムを描いた作品として評価された。

昭和 21 年（1946）



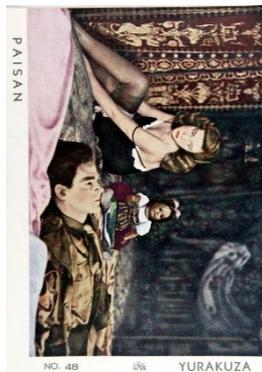
「断崖」
昭和 16 年製作のアメリカ映画。夫に殺害される恐れを抱いた妻の心情を描いた犯罪スリラー。選考委員からは妻の心情の描写が評価されたものの、本年は傑作に乏しいとの感想も相次いだ。

昭和 22 年（1947）



「ヘンリー五世」
昭和 19 年製作のイギリス映画。ローレンス・オリヴィエが監督・主演を務めたシェイクスピア三部作の第一作目。本作は国威発揚を目的として製作された。

昭和 23 年（1948）



「戦火のかなた」
昭和 21 年製作のイタリア映画。イタリアを舞台に戦争を描いた全 6 編のオムニバス形式の映画だったが、日本公開時には GHQ の検閲により一部カットされた形で上映された。

昭和 24 年（1949）



「自転車泥棒」
昭和 23 年製作のイタリア映画。イタリア国内の貧困や社会問題を描いた作品。全編を通して屋外でのロケーション撮影を行い、出演者も監督が街で見つけた一般人を起用している。

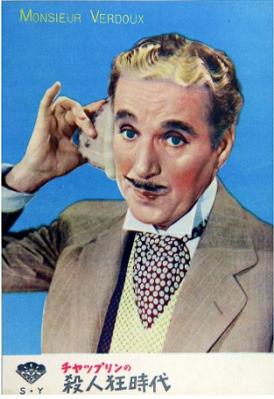
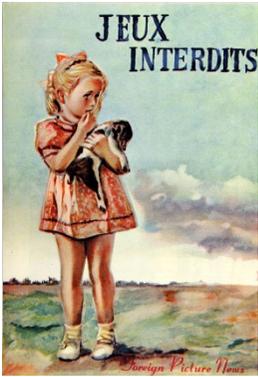
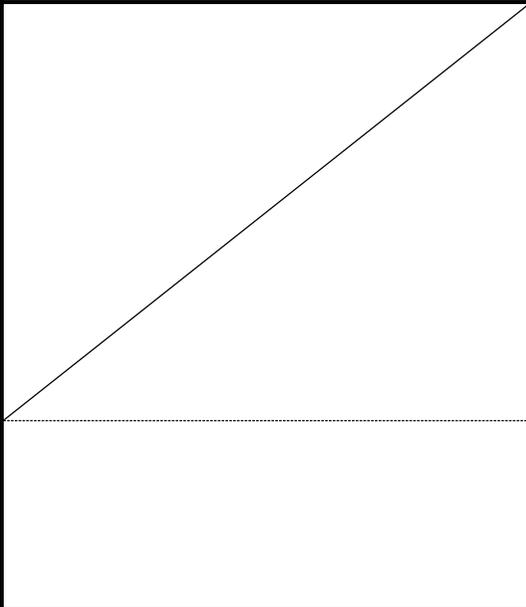
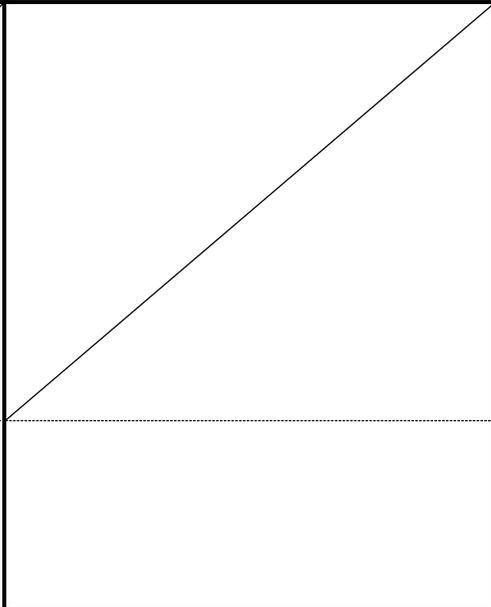
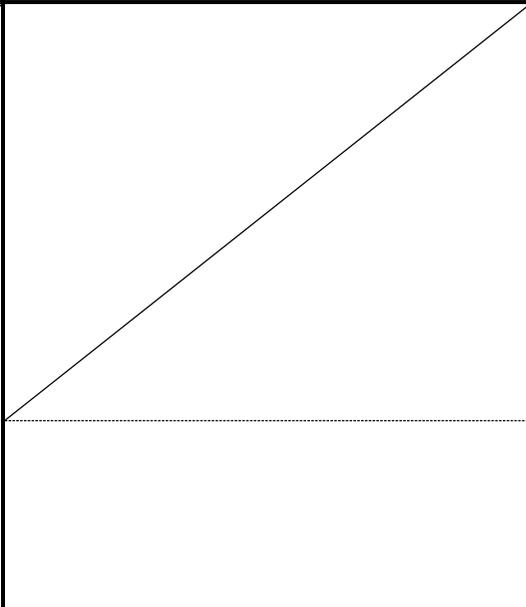
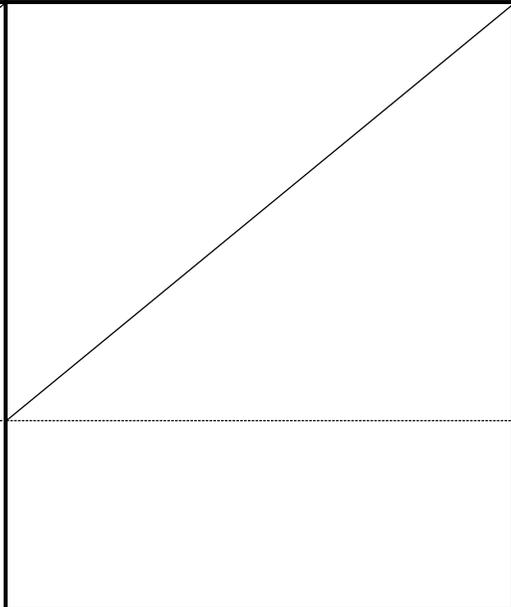
昭和 25 年（1950）



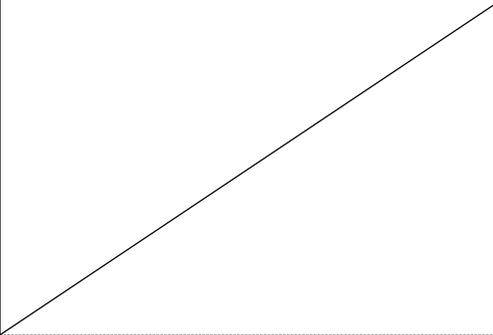
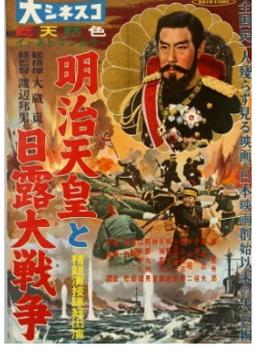
「イヴの総て」
昭和 25 年製作のアメリカ映画。ブロードウェイを舞台に一人の女優の成功劇を描いた作品。まだ無名のマリリン・モンローが出演している。

昭和 26 年（1951）

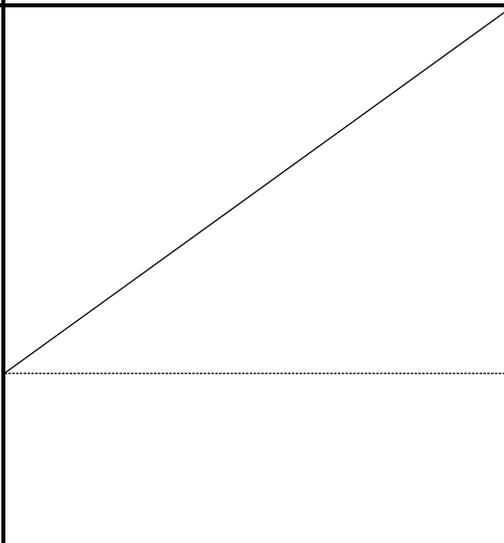
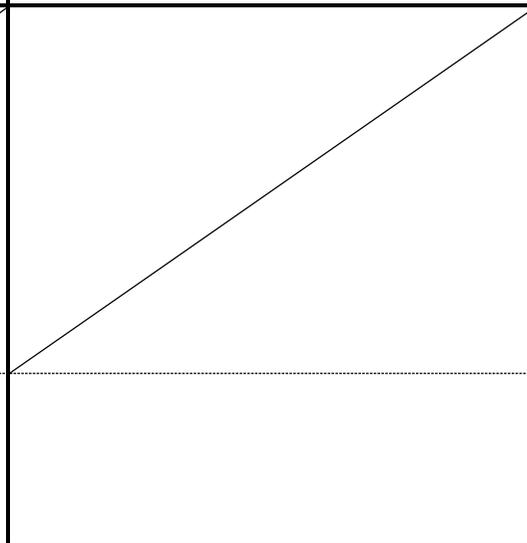
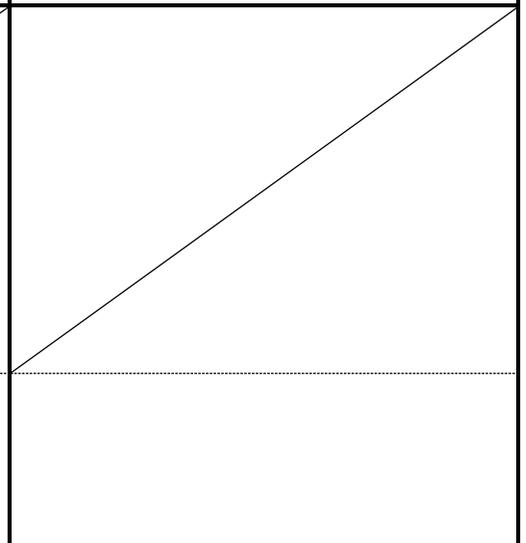
Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

			
<p>「チャップリンの殺人狂時代」 昭和 22 年製作のアメリカ映画。ある殺人犯が死刑台に送られるまでを描いた作品。チャップリンの表現力を評価する意見が多く挙げられている。 昭和 27 年 (1952)</p>	<p>「禁じられた遊び」 昭和 27 年製作のフランス映画。機銃掃射で両親を亡くしたフランス人少女と農家の少年の日々を描いた作品。戦争の戦禍を詩的に表現している点が多く委員から評価された。 昭和 28 年 (1953)</p>	<p>「嘆きのテレーズ」 昭和 28 年製作のフランス映画。フランス・リヨンを舞台に三人の男女の人間模様を描いたサスペンス。人間心理の表現力が高く評価された。 昭和 29 年 (1954)</p>	<p>「エデンの東」 昭和 30 年製作のアメリカ映画。旧約聖書のカインとアベルをモチーフに親子の葛藤を描いた作品。シネマスコープというワイドスクリーン技術で撮影され、画面構成の芸術性が高く評価された。 昭和 30 年 (1955)</p>
			

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

<p>日本映画時代の到来</p> <p>昭和 26 年（1951）に東映株式会社が設立され、昭和 29 年には戦時下で統合された日活が再開すると、大手映画製作会社の製作競争が激化していきました。昭和 30 年以降は、高度経済成長による好景気が後押しし、映画産業は大衆娯楽の中心として大きく進展します。</p> <p>大手の映画会社は製作から配給と興行を兼ね備えており、映画館では常に上映する作品が途切れることなく提供され、映画が量産されるとともに、入場者数も年々増加していきました。そして昭和 33 年には入場者数が 11 億 2,700 万人を超え、日本映画は戦後最大の絶頂期を迎えました。</p>	 <p>「雨月物語」 監督の溝口健二が昭和 27 年公開の「西鶴一代女」に続き、ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞した作品。 監督：溝口健二、出演：京マチ子、森雅之ほか</p> <p style="text-align: right;">大映 昭和 28 年（1953）</p>		
 <p>「東京物語」 「晩春」、「麦秋」と共に同じ名前の主人公・紀子を原節子が演じる。戦後日本社会における家族関係の変容を描いた作品。 監督：小津安二郎 出演：原節子、笠智衆ほか</p> <p style="text-align: right;">松竹 昭和 28 年（1953）</p>	 <p>「ビルマの豎琴」 終戦前後のビルマ（現・ミャンマー）を舞台に、戦没者慰霊のために戦地に残る兵士の姿を描いた作品。 原作：竹山道雄 監督：市川崑 出演：三国連太郎、安井昌二ほか</p> <p style="text-align: right;">日活 昭和 31 年（1956）</p>	 <p>「喜びも悲しみも幾歳月」 灯台守として暮らす夫婦の戦前から戦後に至るまでの生活を描いたもの。全二部に分け、松竹調のホームドラマ作品として人気を博した。 監督：木下恵介 出演：高峰秀子、佐田啓二ほか</p> <p style="text-align: right;">松竹 昭和 32 年（1957）</p>	 <p>「明治天皇と日露大戦争」 初めて天皇を主題として製作された作品。戦後、戦争映画として大ヒットを記録した。 監督：渡辺邦夫 出演：嵐寛寿郎、高島忠夫ほか</p> <p style="text-align: right;">新東宝 昭和 32 年（1957）</p>

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

			
<p>「メトロスコピックス」 アメリカで考案された立体映画のポスター。眼鏡をかけて観る、新しい映画の形が日本でも話題を呼んだ。 昭和28年（1953）頃</p>	<p>「夜明け前 製作速報 No. 2」 「夜明け前」の製作に関する事前広告。撮影セットやロケ地などが紹介されている。 昭和28年（1953）10月以前</p>	<p>「二十四の瞳」 香川県小豆島を舞台に、小学校の女性教師と児童が戦争に巻き込まれていく様子が描かれる。この年のキネマ旬報ベストテンで1位となり大ヒットを記録した。 原作：壺井栄 監督：木下恵介 出演：高峰秀子、月丘夢路ほか 松竹 昭和29年（1954）</p>	<p>「七人の侍」 戦国時代を舞台にした野武士と農民を描いた作品。1年以上を要した撮影では、雄大な戦闘シーンが好評となり、ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞した。 監督：黒澤明 出演：三船敏郎、志村喬ほか 東宝 昭和29年（1954）</p>
 <p>三次元映画用眼鏡 メトロスコピックス映画用の眼鏡。 昭和28年（1953）</p>			

Ⅲ. 復興・再びの黄金時代

エピローグ 黄金時代を経て

映画産業の歩みは、昭和 33 年（1958）の観客動員数の頂点を最後に、ゆるやかに下降の一途をたどります。昭和 28 年から放映が開始されたテレビは、わずか 10 年ほどの間で、瞬く間に浸透していきました。昭和 34 年の皇太子殿下（現・上皇陛下）ご成婚を機にモノクロテレビが普及し、昭和 39 年の東京オリンピックを契機にカラーテレビへの買い換えブームが起こり、この年、テレビの普及率は 90% を超えました。

昭和 20 年 12 月、終戦直後の荒廃した生活のなかでも日本劇場には映画を観るために人々が詰めかけ、行列を作りました。昭和期、二度迎えた黄金時代はどちらも不況・戦争・占領下という、歴史の上でも困難な時代を乗り越えた延長線上に位置付いています。苦難の時代のなかでも変わらず、映画は人々の生活の一部として育まれ続けた結果、現代に繋がる日本映画の基盤が築かれました。



日本劇場に並ぶ人々

マッカーサー記念館提供
昭和 20 年（1945）12 月 9 日

	タイトル	内容	年代	秒数
1	リヒャルト・アングスト (朝日世界ニュース第 146 号)	日独合作映画「新しき土」の撮影を終えた映画カメラマンのリヒャルト・アングストが女優ルート・エヴェラーらと共に神戸港から帰国。映画監督のアーノルド・ファンクが見送っている。	昭和 11 年 11 月 6 日	0:15
2	陣中の人気者 (朝日世界ニュース第 261 号)	映画監督の小津安二郎や俳優の佐野周二・岡譲二など、出征した映画関係者たちの現地での様子が映されている。	昭和 14 年 1 月 6 日	1:18
3	映画「ハワイマレー沖海戦」より	開戦一周年を記念した国策映画「ハワイマレー沖海戦」の最終場面と記録映画「マレー戦記」の一部を抜粋。	昭和 17 年	2:24
4	教育映画に新威力 (新日本ニュース第 140 号)	GHQ は映画によって日本の民主化を図るため、ナトコ(natco) 16 ミリ映写機を貸し出した。各都道府県に新しく視聴覚ライブラリーが設置され、民衆は教育映画に見入った。	昭和 23 年 9 月 8 日	0:31
5	絹代さんかえる (新日本ニュース第 211 号)	アメリカから帰国したサングラス姿の田中絹代。大勢の報道写真班やファンが押し寄せるなか、オープンカーで人波をかきわけながら進んでいく。	昭和 25 年 1 月 16 日	0:50
6	「二十四の瞳」受賞 (読売国際ニュース第 309 号)	キネマ旬報選定の邦画ベスト 1「二十四の瞳」の表彰式が行われ、高峰秀子らが受賞。	昭和 30 年 2 月 6 日	0:27
7	檜舞台の黒沢監督(ロンドン・東京) (朝日ニュース第 638 号)	映画監督・黒澤明がロンドンで映画芸術に貢献した一人として表彰された。国立映画劇場の開場式では紋付袴を着て登壇し、受賞を受けた。	昭和 32 年 10 月 24 日	0:49
8	ハイティーンのアイドル (毎日ニュース第 424 号)	高校 3 年生の吉永小百合は「キューポラのある街」で主演を務め、数々の賞を受賞した売れっ子女優。首相官邸で開かれた芸術文化人の懇親会へも出席した。彼女は映画の撮影、学校での勉強、歌のレッスンと忙しい日々を送る。	昭和 38 年 1 月 10 日	1:54

上映時間 約 9 分

イベント

(1) ワークショップ ミニ映写機をつくろう

日時：令和8年4月4日（土）、4月18日（日）

① 10:30～12:00 ② 13:30～15:00

場所：昭和館3階会議室

対象：小学生以上 ※事前申込制

(2) 映画上映会

演目：「麦秋」

昭和26年(1951)、松竹映画

監督：小津安二郎、主演：原節子、佐野周二ほか

日時：令和8年4月26日（日）13:30～

（受付・整理券配布13:00～）

場所：1階ニュースシアター

人数：50名 ※当日先着順

(3) 展示解説 担当者による展示解説を行います。

日時：令和8年3月29日（日）、4月12日（日）

14時30分～（所要時間30分）

会場：昭和館3階特別企画展会場